

すなわち、改革が進行するなかで、社会的現実をどう解釈し問題解決の学としての社会福祉学を定立していくのか、という視座とその取組みがますます重要となっているのである。

ソーシャルワーカーの成長過程を支援するための基礎研究

高橋 幸三郎*

①福祉の専門教育を受ける学生は、「ソーシャルワーカーをどのようにイメージ」しているでしょうか。多くの学生は、社会福祉援助技術現場実習から帰っても自分の職業イメージを描けないのが現実であるといえないでしょうか。

そのことを現場の職員に話すと、養成校が教育目標として「どのような職業人を育てようとしているのか」不明確であるといった指摘を受けます。あるいは、学生を実習現場に丸投げしているのではないかといった疑問を投げかけられます。

②そうした「職業イメージの形成には、出会いが不可欠」です。

職業人との出会いは、各分野のソーシャルワーク実践事例を教材として作りなおす作業と、「わたしはソーシャルワークをこのように行なっているのだ！」と確信をもって働いている人により実現されます。しかし、確信をもって活動する状況になっていない場合があるといえないでしょうか。この意味で、多様な分野で実践するワーカーの活動と職業的なアイデンティティの形成を支援するための研修や研究が必要になっています。教育の分野では「教師論」というジャンルがあって、教師として力量が形成される過程に関する地味な研究や支援活動が行なわれています。

そうした支援活動の一環として行われる研究は、現職の教師に対する聞き取り調査に基づき「教師像」を帰納的に明らかにします。これまでの価値や理念といった抽象的なレベルからソーシャルワーカーのあり方を明らかにするための論議に加え、実際に専門職として援助を行なっている人との対話をとおしてソーシャルワーカー論を構築していくことが必要です。この作業により具体的に表現された素材は説得力に富んだものになります。

③つぎに、「ソーシャルワーカー像」を伝えるための研究が必要になります。

教師や看護師の職業は一般社会ではイメージしやすいものです。これに比較して、福祉業界の専門職であるソーシャルワーカーとなると、あいまいで分かり難くなっているといえないでしょうか。福祉分野においても、専門職論議の一環としての「ソーシャルワーカー論」につながっていく研究が始まりつつあります。

それは、ソーシャルワーカーとして実践している人の「力量形成過程」を対象にする質的な研究を行

ことにより、専門職のありようを明らかにしようとするものです。ソーシャルワーカーに対する「ライフストーリー」の聞き取りをとおして、力量の形成過程や専門職としての自己を形成させる原動力になるモチベーションを類型化します。

研究成果は、『成長するソーシャルワーカー：11人のキャリアと人生』（筒井書房 2003年）として公にしました。本書の内容は、20年以上の職業経験を持つ11名のソーシャルワーカーに対する聞き取りを行ない、個人の人々の生き方をリアルに表現しています。専門職として成長していく契機を「一皮むける体験」として明らかにし、ワーカーの成長過程を促進させ、アイデンティティを確立させる要因の解明を目指しています。

④今後必要になる研究の内容は以下のとおりです。

専門的な自己形成論、あるいは、専門職文化を明らかにしていくための研究として展開していくことです。これから職業選択をしようとする人に対して、具体的に援助者像を提示することを意図して行なうことです。既に紹介した著書『成長するソーシャルワーカー』で行なった作業は、ソーシャルワーカーの成長過程とそのあり方を検討するための基礎研究といえるでしょう。

医師、弁護士、教師などの場合、蓄積されている手記や生活史を用いて、映画やテレビなどのマスメディアにより専門職イメージが明らかにされています。こうした映像メディアによる専門職の活動内容を表現することは、養成教育の教材としての活用はもとより、国民に専門職の有効性を伝えることに繋がります。そのためには、ソーシャルワーカー個人の生活史や具体的な援助活動に関する事例研究が不可欠なのです。

さらに、職業文化論的なアプローチを用いて、職業に固有な特性に焦点を当てた研究を行なっていくことです。既に述べたように、わたしたちは他分野の対人サービス職が行っている活動に関心を向けて、職業文化の比較を行なっていくことが求められます。これは、職業特性として強調される価値や知識・技術、思考や行動の様式、ライフスタイルを現存するソーシャルワーカーとの対話により作り上げることであり、職業イメージの明確化には欠くことができない研究なのです。